

花 き

実 況

1 キク

奥越の秋植え夏ギクの草丈は、5月20日調査で無摘心の「あかね」(小・赤)で51cm(65cm)と生育は昨年より遅く、草丈も低い。また「あかね」は6月上旬(昨年下半年)からの出荷が予想される。

和泉の暮植えギク「ピース」は5月20日調査で草丈8cm前後、かなり芽立ちが悪い(昨年同時期18cm)。「玉姫」53cm、「釣舟」54cm、「白霧」64cmである。

9月咲きギクの定植は、5月下旬に行われた。10月咲きギクは挿し芽が5月中下旬に行われた。害虫ではナモグリバエが全域で発生が見られ、少～中発生となっている。白さび病は山間部の一部で微発生である。カスミカメムシ類の被害は5月中旬からみられる。凍霜害であるシカミは和泉地区をはじめとして、散見される(写真1)。キクスイカミキリは「釣船」に被害が多かった。他にハマキガが局所的に発生している。



写真1 シカミ症例 (和泉地区、
品種名「みすず」)

福井南部の4月上旬定植8月咲きギクの草丈は5月26日調査で、「翁丸」の腋芽25cm(7)、「小鈴」の腋芽25cm(5)、「小雨」の腋芽30cmで昨年より生育良好である(昨年5月21日調査)。ハモグリバエ類、アブラムシ類の被害が見られる。

あわら市の秋植え夏ギクは20～25cm(5月20日調査)で、全体的に草丈は低い。

坂井市の暮植えギクは、ハモグリバエ類、アブラムシ類が中発生、アザミウマ類が少発生で、草丈は低い。

越前市では、5月15日調査で8月咲きの「はじめ」「恋心」「小鈴」は3月20日～3月25日に挿し芽(昨年3月21日～3月25日)が行われ、4月7～11日に定植し4月21日に摘心した(昨年同時期4月14～15日に定植し4月25日に摘心)。「小鈴」は草丈18(8)cmと昨年より生育良好傾向である。ハモグリバエ類とカスミカメムシ類は地域全体で見られ微発生である(昨年は5月21日調査)。

丹生の春植え8月咲きギクでは、5月25日調査で4月13日に定植した(昨年4月13日)「小鈴」は腋芽18cm(14cm昨年育苗時、生育不良)、「恋心」腋芽20cm(13)、「はじめ」腋芽22cm(17)と昨年より生育良好である。アブラムシ類とカスミカメムシ類は少発生である。9月咲きギクは5月17日(昨年19日)から定植を開始した(昨年5月21日調査)。

二州の4月中下旬植えの8月咲きギクは5月21日調査で草丈は「小鈴」が4.8cm(昨年3.3cm)、「くれない」が6.6cm(昨年6.5cm)、小雨が0.5cm(昨年5.2cm)と昨年並みに小さめである。ハモグリバエ類、アザミウマ類の発生が認められた(昨年5月20日調査)。

若狭の5月20日調査の露地の暮れ植え夏小ギクの草丈は、「とび丸」78.4(昨年17.1cm)、「はじめ」81.0cm(昨年35.4cm)となっている。「つるき」「サンバ」などは出蕾しており、早いものは開花が始まっている。春植え8月咲きギクは「翁丸」が12.2cm(昨年2.0cm)、「くれない」が5.0cm(昨年2.2cm)、「さきかぜ」が7.2cm(昨年2.4cm)と、昨年より生育は早い(昨年5月16日調査)。病虫害は、両作型共にアザミウマ類が発生しており、ハモグリバエ類の吸汁痕や産卵痕が散見される。暮れ植えギクに一部キクスイカミキリが発生した。9月咲きキクは5月中旬に定植された。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の生育は葉長 5cm である(5月15日調査)。本年は乾燥気味であるため生育が悪く、新葉の展開が悪い。遅植の生育が良い。

福井ユリの「リリ」シリーズは今年度4月17日(昨年4月21日)から出荷が始まった。5月17日母の日前後は単価も高かった。

福井の「レッド」の草丈は5月26日調査で115cm(蕾長5cm)となっており、収穫終期を迎えている。

春江のユリは9月8日定植の「ブラックアウト」が61枚、60cm、「パーティダイヤモンド」83枚、100cm、「ナポナ」62枚、75cmである。

リリブライトレッドは5月20日調査でほぼ収穫終わっている。病害虫は葉枯病、アブラムシ類がみられる。

南越の福井ユリ「レッド」が5月20日調査で草丈130cm(125cm)で、5月15日(5月11日)から出荷されている。病害虫はアブラムシが少発、葉枯病少発性である(昨年5月21日調査)。

3 スイセン

葉の枯れ上がりは平年並みで、改植を行った圃場や年内に施肥を行った養成圃では生育良好傾向である。定植時期が遅れた養成球根圃場は葉の成長が悪くなっている。促成栽培用球根の掘り上げが5月20日頃から開始された。

4 トルコギキョウ

あわら市は抑制栽培の切り下株の草丈が5月19日調査で40cm(40cm)となっており、昨年より若干生育は劣っている(昨年5月15日調査)。

大野市では、5月19日調査で4月下旬に定植されたロジーナブルー2~3対葉で、大部分の株が抽だいていない(昨年5月13日調査)。

南越では5月15日調査で「モレットマリン」「ブライダルスノー」「ボヤージュシリーズ」の4月下旬定植作型が草丈15cmである。

二州では5月21日調査(昨年5月20日調査)で、12月上旬播種、4月中下旬定植の「ピンクシルエット」「なみだ」等が4~5対葉となっている。美浜町では3月下旬播種の「ロジーナピンク」「カルメンルージュ」等が、定植適期となっている。

若狭では5月21日調査で、2月下旬から3月上旬に播種された「なみだ」「ロジーナ」「フルフル」等が5月中旬に定植された。

5 その他

福井市のヒマワリ「サンリッチシリーズ」は、5月20日調査で4月中旬播種が35cm(30cm)となっている。一部でダニが微発である(昨年5月21日調査)。

奥越のシャクヤクは5月12日が目揃え会で、平年よりやや早い(昨年5月10日)。出荷先は福井、なにわ、金沢市場である。勝山のシャクヤクは平年並みで干ばつにより草丈は短い。

奥越のアリウムギガンチュームは5月21日調査で花茎長80cm(昨年80cm)、花の直径は4cmとなっており着色が見られ、出荷は5月18日から開始された(昨年5月15日調査)。

対 策

1 圃場の排水徹底

梅雨期、雨が多く降ると畝溝へ滞水し根腐れをおこし、下葉の枯れ上がりや生長の低下などにより出荷量が低下するので、次の対策を行う。

- 1) 畝溝の排水、水の通りを良くするため、溝さらえや除草を行う。

- 2) 畝溝と直角に交わる集水溝を畝の両側（できれば圃場周囲）に必ず設け、排水溝に落とす。すでに設置してある場合は清掃や除草を行う。
- 3) 排水溝が高く排水しにくい場合は、雨の時に強制排水を行うため、排水溝の端に集水枥を設置し、ここからポンプで強制排水を行う。
- 4) 7月咲の暮れ植えギクの場合、滞水が続くと根の活性が低下するので、通路や肩の土を削り、地際に土寄せする。この作業により新根発生が促されるため、生育が向上する。
- 5) 過湿気味の圃場で栽培された花卉は日持ちが悪くなりがちであり、キクではいちょう病の発生につながるため、極力、上記の対策を励行する。

2 秋植え夏秋ギクの管理

- 1) 花芽分化後の乾燥は、花卉の伸びが悪く小輪となるため、中輪品種では乾燥させないように注意する。
- 2) 花芽分化後（開花の40日前）に、止め肥として10a当たり窒素成分で5kg程度を、畝の肩部分に施用し、肥料の分解と上根の発根促進のため、土寄せを必ず行う。特に高温期はガス害の懸念もあるため、速やかに土寄せする。
- 3) 止め肥施用後、降雨が多い年は生育後半に肥料が切れる。葉色が落ちた場合はOKF-1、ハイポネックス等の500～1000倍で葉面散布をするが、白さび病や褐斑病がみられる場合は施さない。
- 4) 中輪品種では発蕾始めに花首の伸長を抑制するために、施設栽培（雨よけ栽培）でビーナイン水溶剤80を10a当たり500～5000倍液50～150ℓを茎葉散布する。伸びやすい品種は1000倍程度で茎葉散布を行い、確実に効かせる。

3 梅雨期の病害虫防除

1) キク白さび病

気温が25℃以下の湿潤な時期に発生する。草丈50～60cmまではジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで1週間に1回の予防散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間にラリー乳剤、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、サプロール乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブルおよびアミスター20フロアブル、これらは品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布するが、同一系統の連用による耐性菌の出現に注意する。

2) キクのアザミウマ類

苗を新たに導入した場合は特に注意して防除する。キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマなど各種があるので、種を確認した上で効果や抵抗性を考慮して薬剤を選定する。特に圃場での切り残し花が発生源となるので早期に除去する。

ミカンキイロアザミウマはキクのえそ病(TSWV)を媒介するので特に発生に注意する。

3) キクのマメハモグリバエ

5月中下旬から優占種がナモグリバエからマメハモグリバエに変わる場合が多い。葉に対する食い込みが多くなると枯れ上がりが増えるため、初期防除を徹底する。マメハモグリバエは幼虫が黄色で、幼虫がさなぎになる前に葉から落下し地中やマルチ上でさなぎとなる。5～7月に発生が多く、発生予察は黄色粘着シートで可能である。

4) ユリ葉枯病（ボトリチス菌）

花芽分化期以降、葉枯病に感染しやすく、圃場排水が悪い条件では特に発生が多くなるので防除を徹底する。雨よけ栽培を行うと発生は少なくなる。露地栽培では出荷の30～40日前、施設で50日前までは、フロンサイド水和剤やダコニール1000などの保護殺菌剤を、1週間に1回散布する。発病を認めたら、発病初期にトップジンM水和剤、ポリオキシシリンAL水溶剤な

どの治療剤を散布する。展着剤では、保護殺菌剤には展着剤なしで散布するが、施設栽培では汚れ軽減のため界面活性剤系の展着剤を用いる。

4 促成スイセンの花芽分化促進処理

- 1) 高温処理開始までに球根の表皮が親指の腹で簡単にむけるくらいに、十分球根を乾燥させる。
- 2) 高温処理は2週間行う。
- 3) くん煙処理は高温処理後にモミガラを1日3時間の割合で3日間燃やして行う。
- 4) 処理後は植え付けの7月下旬まで、風通しのよい納屋や車庫などで保管する。
- 5) 腐敗した球根は取り除き、7月末日ぐらいをめどに定植する。

5 トルコギキョウの葉先枯れ症

- 1) トルコギキョウの葉先枯れ症は、極端な水分ストレスにより、カルシウム欠乏となり、生育中期に上位葉の葉先が褐変や萎縮し、ひどい場合には心止まりになる。組織中にカルシウムが少ない品種は出やすく、障害を受けやすい傾向にある。
- 2) 昼温が高いほど発生しやすくなるので、ハウス内の換気に努める。ハウス内の空気が動いている場合は発生が少ないとされるため、内気扇も有効である。
- 3) 発生しやすい品種については、花芽分化の時期を中心にカルプラス等を数回、葉面散布する（定植約1カ月後から出蕾期までの間、週1回散布するとよい）。

6 梅雨期の切り花出荷

梅雨時期に出荷する場合、出荷箱内での花や葉から、ムレにより灰色かび病等による荷いたみが生じやすいので次のことに注意する。

- 1) 収穫前にハウスの換気を十分に行う。
- 2) 露地栽培の切り花を、降雨時に収穫した場合は、茎の下を持って振り、花卉の間や葉にたまった水を極力取り除く。
- 3) 収穫後に切り花の基部を水中で切り戻し、水揚げを円滑にする。「水切り」などによってできる、切り下の茎や葉はいけ水に溜まらないようにする。いけ水は頻繁に交換して新鮮なものを使う。
- 4) 収穫後、箱詰めまでに花全体が乾くように風通しをよくする。咲きすぎた花は調整時に除く。エアコンの除湿運転や扇風機などで花をできるだけ乾かす。
- 5) 出荷箱に詰めてからも、出荷間際まで箱をあけておき、花全体をできるだけ乾かす。